

# 島崎藤村『破戒』論

伊与田直也

## 序論

島崎藤村の『破戒』は明治三九年に緑陰叢書にて自費出版された部落差別をテーマとした作品であり、田山花袋の『蒲団』（明治四〇年九月『新小説』）と並んで、自然主義文学の先駆けとされている。また、『破戒』は告白することに重点を置いた告白小説なのか、差別社会に対する訴えを主題とした社会小説なのかという二つの側面で論議が繰り返されている。島崎藤村の『破戒』のあらすじは以下のとおりである。

長野県で小学校教師をしている被差別部落出身の瀬川丑松が主人公である。丑松は父の戒めとして、穢多出身であるいうことを隠して生活を送っていた。しかし、同じく被差別部落出身である解放運動家の猪子蓮太郎の差別社会と戦う姿に感化され、その素性を告白する

か隠し続けるかの葛藤に悩み続ける。穢多出身であることを隠し続けて、金持ちの娘と結婚し、政治資金獲得のため厚顔に振舞っていた高柳利三郎を蓮太郎が公の場で、利三郎の素性を明らかにしたことにより、ある夜蓮太郎は利三郎に殺害されてしまう。蓮太郎が亡くなつて、丑松は素性を告白することを決意する。数日後、師範校正の参観日、丑松は教壇に立ち、生徒達に自分自身の素性を告白した。その結果、丑松は小学校を辞めることになり、すでに飯山から追われた同じ部落出身の大日向という人物とともにテキサスでの農業を目指した。

『破戒』は丑松が差別社会に屈しているという点から、否定的な意見も多くみられる。そして、丑松が大日向とテキサスへと渡るといふ結末が不自然であるという先行研究も見られた。藤村自身に対する批評が伊東一夫『島崎藤村

研究——近代文学研究方法の諸問題——』（昭和四四年三月 明治書院）で以下のようにまとめられているので、それを引用したいと思う。

芥川竜之介が「或阿呆の一生」の中で、（老獪な偽善者）と非難しているのは有名であるが、志賀直哉も作品「邦子」のなかで、（島崎藤村が「破戒」といふ小説を書きつつあつた時、どんな犠牲を払つても此為事を仕上げる決心で出来るだけ生活を縮小し、家族達はそのため栄養不良となり、何人かの娘が一人一人死んで行く事を書いた事がある。私はそれを見て甚だしく腹を立てた。「破戒」がそれに価する作物かと云ひたくなつた。何人かの娘がその為め死ぬといふのは容易ならぬ出来事だ。「破戒」が出来る出来ないの問題どころではないではないかと思つたものだ。）と憤慨している。正宗白鳥も、（猫かぶり、偽善者と、泡鳴はをりく／＼私などに向つて、藤村の罵倒をしてゐた。）（「自然主義盛衰史」）と、岩野泡鳴の烈しい非難を伝えている。大宅壮一氏は、（信州人は陰性で辛抱強く、堅忍不拔ではあるが、カラツとしたところがない。それに内攻的で偽善者型が多い。（中略）信州の作家を代表するものは、何といつても島崎藤村であろう。（中略）恐らく彼くらいに生涯マスクをぬがずに通し

た作家は、日本にすくない。といつて、氏の主張される偽善的な信州人の典型を藤村にしているのは、芥川・岩野などの意見と同様である。

このように、多くの作家達が藤村の人間性を批判している。確かに、『破戒』執筆中に藤村は家族を亡くしているため、家族に対する配慮が欠けていたという点から、否定的な評価をされてしまふのは仕方ないと思う。しかし、私は、藤村の『破戒』は部落民である丑松が差別社会に屈して、アメリカに逃避したという物語ではないということ主張したい。少なくとも、テキサスへ渡るといふ行為には必然性があつたのではないかと考える。私は『破戒』が出版される前に出された部落差別と関連した作品（以下、部落小説）などを参考にし、時代背景やその当時の部落小説にどういつた傾向が見られたか、丑松と蓮太郎を比較した上で、丑松の変化を考察し、同時に丑松がテキサスへと渡る必然性を明らかにしていく。

## 第一章 当時の人々の部落差別に対する意識

『破戒』を考察するにあたり、当時の日本の部落差別というものがどういふものだったのかを知る必要がある。江戸時代の土農工商制度から部落差別は成っているとされて

いる。最も下位に属していたのが穢多である。

非人には生れた時からのものもあるが、その多くは犯罪のためにおとされた者であり、姉妹・伯父・姪などの近親として私通した者や、情死未遂の男女などもこれにおとされた。なお、なかには貧困のため自らをおとした者もある。しかし、彼らには穢多と違つて「足抜き」ということがあり、全く固定したものではなかった。(奈良本辰也『部落の歴史と解放運動』昭和三〇年一月 社会法人部落問題研究所)

この引用から分かるように、穢多と非人が当時の差別の対象となつていたとはいへ、さらに穢多と非人との間に差があることが分かる。非人は犯罪や心中などを起した、或いは近親者にそういつた人物がいることによつてその身分となるのである。しかし、非人は平民に戻る事が出来たり、食物や衣服を物乞いしたりすることが許されていたのである。すなわち、同じ差別の対象とはいへ、非人は平民に戻る可能性や物乞いなどの権利を有していたのに対し、穢多は平民に戻るチャンスがなかったり、物乞いをする権利を持つていなかつたりしたという点から、最も下位であつたと判断できる。そのため、丑松の父が丑松に対して、「たとえいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅おうと

決してそれとは自白けるな、一旦の憤怒悲哀にこの戒を忘れたら、その時こそ社会から捨てられたと思え」といったのは、丑松が穢多であると分かつたとき、職を失うだけでなく、二度と社会に戻る事が出来なくなり、絶望的な未来しかなくなつてしまうためなのである。同じように穢多であると周囲から認識された人間に未来はないという風に述べている作品もある。長野楽水『夜の風』(明治三二年七月 春陽堂)の作品中からの引用である。

「家へ帰つてこの子の顔を見りや眼鼻立ちから骨組みまでこの通りりつばな生まれだから、これが素人の子供ならどんな出世もできるだろうに穢多の子じやしやうがねい。どうかこの子ばかりは穢多にして終わらしたくねいものだ。百姓でも町人でも素人の仲間入りをさせたいと思つたから、そこで色々考えてみたけれども穢多の子という肩書きがあつた日にやどうしたつてしようがねい。それにやいつそ思い切つてこの子を道の端に捨ておけば誰か素人衆が拾つてくれるだろう。そうすればその人の子になつても運次第でどうにでもなれる。」

また、こういった部落差別は天皇制と大きく関連している。国民が天皇を崇め、その代を継承していくことで、国

民と天皇との間に差が存在し続けることになるのである。

これにより、国民の平等に対する考え方を捻じ曲げてしまふのである。天皇という崇める存在の位を設けることによつて、その結果国民に階層というものを意識させることになる。すなわち、「平等」という考え方が成立しないのである。そのため階級による経済や社会的環境の格差が生まれ、残り続けることとなつた。明治期、部落差別と関連して、らい病（ハンセン病）に対する偏見があり、それによる差別もあつたと考えられる。明治維新後、人々の移住が自由になつたことで、それまで貧困な生活をしていた人々は社会の重圧から逃れようと故郷を離れるようなことも決して少なくはなかつた。そうして、同じ苦しみを持つ者たち同士が集合し、集合地ができたとされている。山本俊一『日本らい史』（平成九年一二月 東京大学出版会）によると、当時のらい患者の有名な集合地は、香川、神戸、和歌山、山梨、東京、千葉、群馬などであつた。また、政府はらい病の感染の拡大を抑えるために、らい病患者の人種隔離を始めた。らい病は当時不治の病と考えられており、『破戒』が出版されてから数年経つた大正期にも、らい病で悩みこむ人もいた。大正期の『読売新聞』に以下のような身の上相談があつた。

### 癩患者の苦悶

記者様、私は天型病に罹り悩めるものであります。未だ初期であることは申し乍ら、所詮治療の道がないことゝ存じます。親戚故郷友人等知るも知らぬも、見ろさへ厭はるゝ様になるのも刻々迫つて居る様です。然うなつては人生の味が何處に見出すことが出来ませう。さうして社會に害毒を流すといふ方からいつても、私の如きものは自殺した方がよいと思はれます。然し生を欲しない澤ではありません。なんとか治療の方法があるならば是非之に依つて生んことを望みます、記者様今日の医術の進歩を以て、猶不治の難症とされるこの病を救ふことが出来すまいか多聞なる記者様御慈悲を以て救ひの網を投じて下さい（大正七年一月一六日『読売新聞』）

大正期になつても、らい病は不治の病であり、それを周囲の人間に感染させないために、健康な人間とは隔離したり、避けられるようになっていたりしたということが読み取れたと思う。「私の如きものは自殺した方がよいと思はれます」と書かれていることから、当時のらい患者には相당한精神的なストレスであり、差別の対象であつたと考えられる。

『破戒』が発表された当時はすでに解放令により、穢多や非人は平民の籍に戻されていたが、平民に戻つたからと

いって、差別がなくなつたわけではなかつた。それは戸籍制度が関係している。明治五年（一八七二年）から壬申戸籍が施行されたが、その新しい戸籍には旧身分が記されていた。そして、その戸籍の一般公開する原則があり、その戸籍を誰もが閲覧することができ、旧身分がどの階級であつたかということを知ることができたのである。勿論、社会的には「平等」を宣言していても、人々の心の中の偏見や先入観などから成る差別の感情はなくなつていないため、当然旧身分が穢多や非人である人物とは関わりを持ちたくないわけである。つまり、実質上部落差別はなくなつていなかつたのである。当時の部落小説でもその様子はうかがえる。松の家みどりの『開明世界・新平民』（明治二一年）の作品では以下のような描写がある。

或時、土地の人民と此新平民の間に一の紛議惹起せり（略）明治五年学制の頒布ありて各町村に小學校を設立することとなり此西條村も學校を設立するに際し従来の村民ハ新平民の子弟を入学せしむるハ甚だ望ましからず若し入学せしめれば子弟を出して其の學校の教授を受くるを好まず

このように、例え身分制度がなくなつたとしても、まだ部落民に対する嫌悪感や差別は残り続けており、「解放令」

はほぼ無意味に等しかつたのである。

それから、戸籍が閲覧禁止となるまでに九十年以上が掛かり、昭和四三年（一九六八年）に全面閲覧禁止となつた。また、当時部落民でなくとも、部落民の肩を持つ人々も同じように白眼視されていたのではないかと考える。幸堂得知「穢多の大望」（明治三三年五月『新小説』）の中でそのような光景が見える。「穢多の大望」は語り手が部落差別に関する話を二つ紹介する形式の作品であるが、一つ目に紹介した作品に白眼視の傾向が見える。一つ目の話のあらすじである。（注一）

ある有名な書家のところに、四〇歳くらいの男が依頼に來た。男はその書家に「白山大明神」と書いた旗を作つて欲しいと頼み、大金を渡した。書家は依頼を引き受け、数日後その旗を完成させ、店の前にその旗を立てていた。それから一〇日程経つた頃、その書家の弟子たちがやってきて、「白山」という地区は部落地区で、そんな地名を書いた旗を立てていることは部落民の肩持ちであり、大変恥ずかしい行為だという。町中にそのことが知れ渡り、その書家に頼みにくる人は誰もいなくなつた。

以上のように、例え部落民でなくとも、部落民の味方、

もしくは周囲の人々に部落民の肩を持っているという風  
思われてしまうと、その人物までも軽蔑や差別の対象とな  
ったのである。そのため、部落民を差別、または関わりを  
持たないようにする（せざるを得ない）という社会の暗黙  
の了解事項として、差別が存在し続けたのである。（現在  
も完全には根絶されていない）そのため、部落民であつた  
人々が、当時の日本で部落民以外の人々と同じように自ら  
新しい仕事を始めたり、仕事で成果を出したり、評価を貰  
うことが出来なかつたのである。すなわち、丑松が海外に  
渡るといふことは、当時の社会背景から考えると自然な行  
為であると考えられるのである。第三章で詳しく述べるが、  
海外と当時の日本を比べても、部落民であつた人達に対す  
る反応は違つていて、日本にいる時以上に将来性があつた  
のである。

## 第二章 丑松の考察

当時の部落差別を知つた上で、次に『破戒』の作品中で  
特に重要な告白の場面に焦点を当てて考察していきたいと  
思う。『破戒』はドストエフスキーの『罪と罰』（明治一  
九年一〇月）を題材としていると考えられており、それに  
関連した先行研究も見られた。藤村は田山花袋に当てた手  
紙（明治三六年一月一九日）の中で、以下のように記し

ている。『島崎藤村全集第十九巻書簡集』からである。

御手紙辱く拝見仕候。「罪と罰」拝読を終り申候。猶  
拝読いたせしニイチエ文集と共に、不日小包にて御返  
送申上べく候。メレジコウスキイの論文とやらは、此  
際拝見せば一層の参考と相成り可申、是非拝読いたし  
度候。猶「罪と罰」につき、委敷ことは拝眉の上御話  
申度、御来遊奉侍候。

藤村は『破戒』執筆中に『罪と罰』目を通しており、ま  
た『破戒』と『罪と罰』とで、いくつか共通する部分も見  
られる。『罪と罰』のあらすじは以下のとおりである。

貧しい生活を送る元大学生のラスコーリニコフは、自  
分自身が非凡な人間であると考え、非凡な人間は善の  
ためなら、秩序を踏み外すことも許されるといふ思想  
の基に、悪徳な高利貸しの老婆アリョーナを殺害して  
しまう。また、偶然その現場にいたアリョーナの義理  
の妹であるリザヴェエダもラスコーリニコフは殺害し  
てしまう。しかし、その行為に対して、罪悪感を抱き、  
ラスコーリニコフは苦しむようになる。ラスコーリニ  
コフは、自分よりも貧しい暮らしをしていて、生活を  
支えるために売春婦として働くソーニヤの姿に胸を打

たれ、自らの罪の告白の相手に選ぶ。最終的にラスコーリニコフは自首を決意する。

『破戒』と『罪と罰』との共通点と相違点をまとめてみた。

・『破戒』と『罪と罰』共通点

- ① 主人公が罪悪感を抱き、葛藤に苦しむ日々を過ごす。
- ② 自分自身のことを告白してもいいと思える人物と出会う。
- ③ 自ら告白する。

・『破戒』と『罪と罰』相違点

- ① 両作品とも主人公が一般人とは異なる特徴を持っているが、『破戒』では、丑松が法に触れるようなことをしようと考えている場面はない。(素性を隠したいだけである)
- ② 『破戒』では、丑松が穢多であることを父から隠すように言われていたが、『罪と罰』ではそういった第三者から罪を隠すように言われる場面はない。(自発的な隠匿)
- ③ 『罪と罰』と『破戒』では、秘密が公になった時の影響力が異なる。

これらのことから、藤村はドストエフスキーの『罪と罰』から、少なからず影響を受けていたと推測される。しかしながら、相違点からわかるように、『罪と罰』の自ら殺人という秘密を作り出してしまったのに対し、『破戒』はそれとは異なり、穢多であるということは生まれながらにして持ち合わせている要因である。すなわち、ラスコーリニコフの殺人という罪は自らの過ちで負うこととなった要因であるが、丑松の穢多であるということは最初から逃れることが出来ない要因なのである。丑松の身分を非人でなく、穢多を選んだのも、穢多の方がその逃れることが出来ない「要因であるということ」を色濃くすることができるからである。それによって、丑松の苦悩をより上手く表現することもできた。また、自らの過ちで罪を負った非人の身分である人物を教師として設定するには無理が生じるという点から、穢多という身分を選んだとも考えられるのではないだろうか。そのため、「生まれながらにして負う」という形式をとり、作品上で設定に無理のない穢多を選択したのだと私は推測する。しかし、当時の社会では「解放令」が出されていたわけであり、社会的には部落民の階級を戻していたということから、恐らく穢多である人物を法的に裁くようなことはなかったと考える。それに対し、『罪と罰』のラスコーリニコフはリヨーナとリザヴェーダの二人を殺害しているわけであるから、十分死刑の可能性も十分あり

得る。その点で見れば、告白したことによる代償は『罪と罰』の方が大きいことが判断できる。

また、告白の形式は少し異なるが、幸徳秋水の作品で、関連があると思えるものがあるので、それと比較してみたいと思う。幸徳秋水の「おこそ頭巾」（明治二十七年一月一日から二月七日まで『自由新聞』）で、主人公の莊吉が、父に実は莊吉が部落民であったということを告白される場面では以下のように書かれている。

「仕方がない、汝の阿母さんは実は……新平民だ、惘然に汝等は二人は其子なんだ」と一気に断然と言放つて、顔を背けて齒を切るに、初めて聞きし莊吉はアツトばかり唯だ夢心地、稍やありて我に返れば、冷水ざんぶと冒頭に注ぐが如く毛孔立ち、湧返る情なき愧しさ扱は恨めしさに、血を絞りたる唯だ一句

「新平民の子だったか」（中略）

「今知りませんでした。新平民の子、宜しう御坐います、心理からも平等の人間一匹、華族でも新平民でも何の高下、新平民結構です、王侯将相種あらんやです、私は是から立派に新平民と名乗ります、宜しう御坐います」

自ら素性を告白するという構図においては『破戒』とは少

し異なるが、共通してみられるのは、主人公が部落民であるということを受け入れている点である。しかし、「おこそ頭巾」では、莊吉が「私は是から立派に新平民と名乗ります」といつているところから、差別社会と戦っていく強気な姿勢がうかがえるのではないだろうか。それに対し、『破戒』の丑松は穢多である自分を「実は、私はその卑賤しい穢多の一人です」「不浄な人間です」というようにいつており、自分の位が下であることを宣言してしまつてゐる。つまり、これは差別社会と戦っていく姿勢がないということではないだろうか。

そこで新たに、丑松と蓮太郎とも比較してみたいと思う。丑松と蓮太郎の行動の起こし方の性質は異なる。丑松の告白に関しては、父親に素性を隠せと言われたり、蓮太郎の差別社会に対する姿勢に感化されたり、蓮太郎が殺害されたりしたことによることなどが関係して生じた結果である。すなわち、外部からの事柄が丑松に変化をもたらせたのであり、丑松自身から芽生えたものではないのである。それとは異なり、蓮太郎は自分自身から芽生えた感情で、主張をしている。蓮太郎が感情を言葉にした箇所を本文から引用する。丑松と蓮太郎が出会い、風呂上がり話している場面である。

「どうも當世紳士の豪いには驚いて了ふ——金といふ



ものの為なら、奈何なことも忍ぶのだから。瀬川君、まあ、聞いて呉れたまへ。彼の通り、高柳が體裁を飾つて居ても、實は非常に内輪の苦しいといふことは、僕も聞いて居た。借財には借財を重ね、高利貸には責められる、世間への不義理は高む、到底今年選挙を争ふ見込などは立つまいといふことは、聞いて居た。しかし君、いくら窮境に陥つたからと言つて、金を目的に結婚する氣に成るなんて——あんまり根性が見え透いて浅猿ましいぢやないか。あるひは、彼男に言はせたら、六左衛門だつて立派な公民だ、其娘を貰ふのは至當ぢやないか——斯う言ふかもしれない。それならそれで可さ。階級を打破して迄も、氣に入つた女を貰う位の心意氣が有るなら、又面白い。何故そんなら、狐鼠々と祝言などを為るんだらう。何故そんなら、隠れてやつて来て、また隠れて行くやうな、男らしくない眞似を為るんだらう。苟くも君、堂々たる代議士の候補者だ。天下の政治を料理するなど長廣舌を振り乍ら、其人の生涯を見れば、奈何だらう。誰やらの言草では無いが、全然紳士の面を冠つた小人の遣方だ——情ないぢやないか。成程世間には、金に成ることなら何でもやる。買手が有るなら自分の一生でも賣る、斯ういふ量見の人はいくらも有るさ。しかし彼男は、賣つて置いて知らん顔をして居よう、といふのが酷し

い。まあ、君、僕等の側に立つて考へて見て呉れたまへ——是程新平民といふものを侮辱した話は無からう。(本文第九章三)

長々と引用したが、蓮太郎の高柳に対する憤りが分かりやすく書かれている。蓮太郎は、高柳に対して、素性を明かさなういふことと、金を得ることに手段を選ばないことについて、怒りを露わにしている。この感情は、蓮太郎自身から直接芽生えたものである。それを丑松に直接伝えるというように、自分自身から行動を起していることも分かる。つまり、蓮太郎には自主的行動力があるのだ。丑松自身も「よし、明日は先生に逢つて、何もかも打開けて了はう。」(本文第九章四)と決心しているが、「隠せ。」という戒めを優先して、行動には起さなかつた。本文よりその時の心情が見える。

丑松に言はせると、自分は決して一生の戒を破るのでは無い。是が若し世間の人に話すといふ場合でも有つたら、それこそ今迄の苦心も水の泡であろう。唯斯人だけに告白けるのだ。親兄弟に話すも同じことだ。一向差支が無い。斯う自分で自分に辯解して見た。丑松も思慮の無い男では無し、彼程堅い父の言葉を忘れて了つて、好んで死地に陥るやうな、其様な愚な眞似

を為る積りは無かつたのである。

「隠せ。」

といふ厳肅な聲は、其時、心の底の方で聞えた。急に冷たい戰慄が全身を傳つて流れ下る。さあ、丑松も少し躊躇はずには居られなかつた。「先生、先生」と口の中で呼んで、どう其を切出したものかと悶いて居ると、何か目に見えない力が背後に在つて、妙に自分の無法を押し止めるやうな氣がした。

「忘れるな。」とまた心の底の方で。(本文第十章一)

ここでは、丑松が蓮太郎に打ち明けた時に、メリットとデメリットを考え、告白しない方がメリットの方が多いと考へ、告白しないことを選択している。この引用からみると、告白によつて、清い人間になろうとするよりも、丑松自身が単に楽になりたいということを重視していると解釈する方が正しく思える。「何か目に見えない力が背後に在つて、妙に自分の無法を押し止めるやうな氣がした。」と文を記したのはその「目に見えない力」が父親という存在とも読み取れるが、それが丑松自身の利己心であり、それを物的的に表現しているのである。

次に作品中で特に重要な場面である、丑松の告白部分に焦点を当てたいと思う。やはりこの告白はどこか不自然さが感じられる。丑松が素性を告白する場面で、まだ疑問が

残る。丑松は自分が穢多であるということを謝罪している点である。

「皆さんが御家に御帰りに成りましたら、何卒父親さんや母親さんに私のことを話して下さい——今まで隠蔽していたのは全く済まなかつた、と言つて、皆さんの前に手を突いて、こうして告白したことを話して下さい——、私は穢多です、調理です、不浄な人間です。」(本文一二章六)

丑松は蓮太郎の死によつて、自身が穢多の人間であるということを告白しようと決心したとしても、それを隠していたことを謝罪するだけではなく、穢多という人間が「不浄な人間で」とあると宣言する必要があるのだろうか。自身の葛藤からの脱出であつても、差別社会への敗北とも捉えられてしまう原因は恐らくこれであると思う。湯地孝氏はこの作品の結末に対して、以下のように否定を述べている。

丑松の苦悶に形の上で解決を附けるのは考へものであるが、一步を譲つて解決をつけるもよいとして、この作の結末はよいとは云へない。丑松が素性を明かさうと決心する近因、直接の原因を作者は蓮太郎の突然の

死にしているが、之が失敗の第一である。丑松は社會の非道な迫害に對しての憤り、蓮太郎の持つ思想の感化、自身の良心に對しての自覺等からして既に、秘密を捨てようと思つてゐたが、それを敢へて爲し得ない處に彼の苦悶があつたのである。（「破戒」の論）

（大正一五年九月『國語と國文學』）

丑松の葛藤に答えを出さないで終わつてしまつていたら、作品としての主張が欠如してしまふ結果になる。湯地氏が述べているように、蓮太郎の死が丑松の告白へと導かせたのだとするならば、それによつて、丑松の告白が社會に對するものではなく、單に自己満足なものに見えてしまふ。そういう点で見れば、氏のいうように蓮太郎の死は失敗なのかもしれない。しかし、蓮太郎を亡くならせてしまふことで、読者の注意を、丑松にもう一度集めることはできた。繰り返しになるが、丑松は差別社會と戦おうとしたり、開き直ろうとしたりする気持ちは、はじめからなかつたのではないだろうか。本文中で、丑松が蓮太郎と別れた後に以下のようなことが書かれている。

一旦秘密が口から泄れた以上は、それが何時誰の耳へ伝わらないとも限らない（中略）第一、今の場合、自分分は穢多であると考えたく無い、これまでも普通の人

間を通つてきた、これから將來とても無論普通の人間で通りたい、それが至當の道理であるから（本文第九章四）

自分がこれまで「普通の人間」として生きてきたのだから、差別社會を改革しようとするのではなく、單に現在の自分を守り続けたいと考え、自らを穢多ではないというように合理化しようとしていると解釈することが出来る。丑松は差別社會の變革よりも、自己を保持し続けることを優先しているのである。人間のありのままの姿を描写しようとする自然主義により、人間が隠し持つ醜悪性や弱さ、葛藤なども作品により深みを持たせるものであるということを気付かせることができたと考えられる。

三好行雄氏は論のまとめの部分で以下のように述べている。

「破戒」という小説内部の瀬川丑松と「社會」との関係は、それを作者と社會との關係にそのままうつしうえることができた。出生の秘密を告白してあたらしい生の可能をひらこうとした丑松の決意は、「破戒」一篇の制作に自我確立の可能をたずねようとする藤村の決意と等質だったのである。丑松における藤村の自己投影はそこまでほりさげてみられねばならぬ。（島

崎藤村——断片的ノオト——」（昭和三三年二月『国文学』）

告白によって、差別社会の変革を試みようとするのを目的にするのではなく、告白することで、それまでの自分を捨て、新たな可能性の中から新しい自分自身を獲得していかうという目的だったのではないかと三好氏の考えである。すなわち、丑松の告白が社会的な広い視点によるものではなく、個人の視点であり、個人が自分自身の変化を助長するものであったのである。それに関連して、田中富次郎『島崎藤村Ⅱ 『破戒』・その後』（昭和五二年一月 桜楓社）から以下の文章を引用する。

もともと、『破戒』の内容は、部落という素材のうへで展開するが、『破戒』のねらいは、社会性意識をうちだすことではなかった。『破戒』のねらいは、古い空気の中に生まれた早い目ざめが、古い慣習のなかで時にギセイになっても、それは、時の流れの中で永住するという幅の広い主題を訴えることであつた。

葛藤の中で生まれた新たな個人の自我を、外部から圧力を加えられたとしても、自我を拒むことなく、それをあるがままに受け入れ、その時代の中で生き続ける姿勢を主張

したかつたのではないかと考える。よつて、社会を対象としたものではなく、丑松個人の精神的な葛藤・変化に重点を置いた告白小説としての側面が強いと私は考える。

また、先行研究である北川鉄夫氏の『部落問題をとりあげた百の小説』（昭和六〇年五月 部落問題研究所出版部）において、氏は『破戒』について触れており、告白部分において以下のように記している。

私はこの「土下座」をしたということについて、一つだけ問題を持つている。それはキリスト教徒の懺悔の形式に、地に伏して懺悔する形があるからである。それは主として、旧教徒だと思ふが、地にひざまづいて心の痛みを懺悔するのである。藤村も十七歳のとき、東京の高輪台町教会で、のちの小諸義塾長となつた先師の木村熊二の手で洗礼を受けている。そして明治女学校で巖本善治の下で教師となるが、教え子佐藤輔子との恋愛問題などがあり、二十二歳のとき教職を辞し、同時に教会の籍も脱してしまう。きわめて短い期間ではあるが、彼はキリスト者として、過ごしている。そうした経歴を持つているからといって、「破戒」の丑松の土下座をキリスト者の懺悔と結びつけることは短絡的に過ぎると思ふが、各位の批評をえたいと思ふ。こうしたキリスト者の土下座は、外国映画などで見て

きたことでもあり、部落差別の痛みの告白と、神への罪の告白を同日に談じえないといえはそれまでだが、「破戒」の発想の下敷に、ドストエフスキーの「罪と罰」が一部あることを考えての私の推論の一つである。

氏はあくまで推論の一つとして、丑松を土下座させたことは、藤村がキリスト教徒だった時期が関係しており、丑松を土下座させたのも、そのキリスト教の懺悔の形式を活かしたのではないかと推測している。その形式を用いて、告白するだけでなく、土下座をさせることによって、キリスト教が主であるアメリカへの渡航が結びやすくなるという考え方もできるのでないだろうか。仮に、そうであるとしたならば、この告白の場面ですでに、丑松の中にアメリカでの挑戦という計画が芽生えていており、丑松の告白が苦悩や葛藤から楽になりたいという単なるカタルシスではないということが判断することができる。

### 第三章 テキサスを目指したことについて

作品の結末で、丑松は教員を辞め、大日向という人物とともにテキサスの地を求めて旅立つ。慶応三年（一八六七年）の明治維新により、人々が海外へと渡ることも可能になった。この作品が発表される前後に、実際に日本人が外

国に旅立ち、そこで農業に励み、日本村を作り上げることがいくつも見られた。そういったことも取り入れられていると考えられる。当時のそれについて書かれた新聞記事を挙げる。

倫敦ろんどんの日本村落 昨年十二月初はじめの倫敦支那新聞に曰く近々倫敦のケンジントンにて一種新奇の博覽會を開く由其模様を聞くに同所のハムフリーズ館並に其近隣の土地に一の日本村落を設け其地面の廣さハ一エークルとなし之を五街に區畫し其中に各種の舖店を設けて種々の品物を製造販賣する法にて其舖店には總て日本人を借住せしむる筈なりと云う（明治一八年一月二十九日『朝日新聞』）

北米の日本村 小笠原島製盆事業に失敗したる田中鶴吉再び米國に渡り日本村を開かんことを目的とし十年一日の如し勤儉力行結果モンドリー灣附近の地面を買入れんとて目下其手索中なり（明治三三年六月二日『朝日新聞』）

テキサス米作談 去三十六年來北米テキサス州に赴き米作を營みて成功せる前代議士西原清東氏が昨夜東京基督教青年會にて爲したる米作談の要領左の如し尚同

氏は本日より来る八日まで毎日午後同館に於て廣く有志者の質問に慶答する筈 資本と學識と經驗を有する我同胞が陸續北米テキサス州に赴き立派なる日本村を設立するに至らんとは余の最も望む所、同地方一帯の米國人は素より大いに之を歓迎す（明治四〇年三月四日『朝日新聞』）

これらの記事から読み取れるように、日本人が海外で日本村を作ることができ、部落民であった人達にとつては日本にいる時以上に将来性があり、活躍することができたのである。当時の記事で部落民であった人達が海外に日本村を作ると書いた記事は見当たらなかったが、現地の人々も日本村を作ることとそれほど反抗の姿勢を見せるようなこともなかったと推測できるので、全く社会的な差別がなかったとは断言できないが、当時の日本のように旧身分が部落民であるという理由で差別の対象となることはなかったと考えられる。

また、『破戒』が発表される前の部落小説にも、主人公や登場人物が海外に渡る、もしくはその計画をするといういくつか場面は見られた。前掲の北川鉄夫氏『部落差別を取り上げた百の小説』を参考にして、その例をいくつか挙げようと思う。

・松の家みどり「新平民」

（明治二二年『開明世界・新平民』共隆社）  
信州松大在の部落の主人公がイギリスに渡り、そこからアメリカへ渡り、貿易商となる。

・しやうりんはくえん あんせいみつくみさかずき松林伯円「安政三組 盃」（明治一八年 速記法研究会）

主人公小染の乗っていた船が難風のため、ハワイに漂着。そこでキリスト教の宣教師に救われ、ともにサンフランシスコへと渡米した。現地で日本語教員となり、日本という国を教えることに励んだ。

・長野樂水『夜の風』（明治三二年七月 春陽堂）

名古屋の穢多夫婦が生まれて間もない男児を捨て（手放し）、その捨て子がアメリカに渡り、靴職人となり経済的に成功。

・天台道士『はんかいゆめものがたり禁噲夢物語』（明治一九年 出版社未詳）

男が群馬県の宿に泊まり、夢を見る。夢の中では、あらゆる穢多の村民たちが海外へと進出していくという会議がされていた。

このように、藤村は『破戒』以前の部落小説の枠組みを用いていたことがわかる。当時の一部の部落小説はこうい

った登場人物の出世の傾向が見られた。

藤村が結末として、丑松をテキサスへと向かわせたことは、出世物としての部落小説から少なからず、影響を受けていたのではないかと考えられる。しかし、それらと異なるのは、その後の結果（成功したか失敗したか）を書いていない点である。海外へ渡航すればうまくいくという考えを無責任に押しつけたくなかった、そして当時の出世物の作品とは同じ形式を取ろうとはしなかった。それは同じような出世や成功の結末を加えてしまうと、丑松の葛藤や告白の部分が色あせてしまい、単なる出世物語として見られてしまう危険性がある。そのため、渡航後の丑松の生活の描写は省略したのではないか。それまでの理想的な展開の傾向よりも、人間のありのままの姿を描写することを優先していることが分かる。丑松がテキサスを目指したことは、一見差別社会との闘いから逃避しているように思えてしまいかもかもしれないが、社会的な差別や圧力に苦しむ部落民に新たな可能性や自由はあるということを示していることと解釈することもできると私は考える。

## 結 論

藤村は『破戒』を執筆するにあたり、当時の部落小説や社会状況などから影響を受けていた。それまで詩人で浪漫

主義だった藤村が、当時の部落小説の傾向とは少し異なる『破戒』を執筆している時期は浪漫主義から自然主義への転換期であった。丑松自身に社会変革を目指すものではなく、告白は個人の精神的な変化やめざめを助長するものであったのである。また結末として丑松がテキサスを目指したことは差別社会からの逃避ではなく、人間の可能性や自由を指し示すものであった。当時の日本社会では、旧部落民は行動を起したり、一般の人々と同様な生活を送ったりすることが不可能に等しかったので、丑松がテキサスへと渡ることが自然なことであることが分かる。丑松のテキサスへの渡航後の生活を省略した点に関しては、それまでの部落小説でいくつも見られた出世物の傾向に染まらず、読者に単なる出世物語として見られてしまう危険性を回避するため、あくまで浪漫主義よりも自然主義を重視して省略したと私は推測する。それにより、藤村がそれまでの浪漫的な部落小説ではなく、浪漫的側面を極力除外して、精神的葛藤や個人の変化といった人間のありのままの姿を描写する自然主義を優先した部落小説を書くことに成功することができたのである。

注（一）「穢多の欲望」の中で、作中で一つ目に紹介された話のあらすじは挙げたが、二つ目に紹介されたあらすじは以下のと

おりである。

穢多頭の娘お菊が町人の一人息子小太郎に惚れ、婿にした  
いと思うようになる。然し、その娘は両親からは愛されて  
いたが、容姿が醜く、周囲の人間からは化け物のように見  
られていた。小太郎の父である庄司は、小太郎が一人息子  
であるから、婿には渡したくはなく、ましてや容姿の醜い  
娘に渡したくないと思っていた。その思いとは逆に、小太  
郎はお菊に溺愛していた。庄司は家来たちに、小太郎が夜  
中眠っている間に運び出すようにいい、雪山の方へと運ば  
せた。家来たちを帰らせ、息子と二人きりになった時、庄  
司は小太郎を起こし、好きに人生を全うするといいと伝え  
た後、自害した。その後、お菊の家に招待されて結婚を迫  
られるが、結婚の気分になれず、小太郎は答えに戸惑う。  
そこに小太郎の母である小谷が出てきて、無理やりお菊と  
結婚させるようにするが、小谷は亡くなった庄司の霊に取  
りつかれて、狂い出し、急死する。小太郎も庄司の霊に取  
りつかれて、刃物を振り回し、お菊の家の人間を全員殺し、  
家を飛び出した。数日後、父の庄司の墓の前で小太郎は亡  
くなっていた。

### 参考文献

- 島崎藤村『破戒』（昭和二十七年一月）新潮文庫）  
松本富夫『部落問題文芸・作品選集』第一〜五〇巻（昭和四八  
年）昭和五五 世界文庫）  
湯地孝『破戒』の論』（大正一五年九月『国語と国文学』）

三好行雄「島崎藤村——断片的ノオト——」（昭和三十三年二月）『国文学』

伊東一夫『島崎藤村研究——近代文学研究方法の諸問題』（昭和四四年三月）明治書院）

山田富次郎『島崎藤村Ⅱ『破戒』・その後』（昭和五二年一月）桜楓社）

伊藤信吉『島崎藤村の文学』（昭和五八年八月）今泉誠文社）

北川鉄夫『部落問題をとりあげた百の小説』（昭和六〇年五月）部落問題研究所出版部）

川島秀一『破戒』の構造——〈内部の生命〉への道程——」（昭和六一年一月）『日本文芸論集』

東栄蔵『破戒』と部落解放——（平成元年三月）『国文学』

山田和男『部落差別現象をめぐる憲法学的考察——差別立法措置をめぐる比較法的見地からの考察付——』（平成一五年一月）

（いよた・なおや）平成二十三年卒業生）